

私は大学1年の夏休み、カンボジアへ旅立ちました。私の中のカンボジアのイメージは貧しい生活を送っているんだろうなあというものでした。子どもたちは学校にも通えず、親の仕事の手伝いをしたり兄弟のお世話をしたりしているというイメージがありました。

滞在2日目に、車ででこぼこの舗装されていない道の先にあるO Romcheck小学校に行きました。カンボジアでの初めての訪問先でした。車をおりると門から校舎までの道の両端にずっと子どもたちが並び、両手を顔の前で合わせ歓迎してくれていました。授業風景を見学すると、下は土で隣のクラスの授業が聞こえ、よく見ると小さな兄弟を抱きながら授業を受けている子がちらほら見えました。また、話を聞くと学年は小学6年生なのに年齢は16歳という子もいました。

この村では、自分の子どもを学校に通わせ、学校のトイレまで自分たちで作っているのは本当に素晴らしいなと思いました。村の人たちが子どもたちを学校に通わせたいという思いがとても伝わってきました。

学校の子どもたちとは最初は距離がありましたが、すぐに打ち解け私たちと一緒に笑顔で遊んでくれました。きらきらと笑いながら友達と一緒に遊ぶ子どもたちを見て、この笑顔を守りたいという気持ちになりました。きっとこの子どもたちの親も同じ気持ちでこの子達を学校に通わせているのだろうなと思いました。

滞在3日目は、ホームランドへ行きました。そこには、様々な年齢層の子たちがいました。笑顔で里親の方からのプレゼントをもらったり、けん玉や駒など日本の遊びをしていました。しかし、一人一人にとても深刻な過去があることを聞き、産まれる場所が違うだけでこんなにも生き方に差が出るのかと衝撃を受けました。これから、日本に帰って私に何ができるのか、将来をどう生きていくのか。これは、私の今後の目標になりました。

カンボジアでの最後の夜は、ホームステイをしました。私たち、セカンドハンドユースが奨学金を支援している19歳の女の子の家です。私よりも流ちょうに英語を話せたので聞き取るのがやっとで自分のことを少ししか話せなかつたのが残念だったので日本に帰ったらもっと英語の勉強を頑張ろうと決めました。一緒に話しをする中で話題のほとんどがボランティアの話でした。ボランティアの内容が高齢者の人の家を掃除したり病気になったら病院に連れて行ったり、ご飯を届けるというものでした。また、私たちユースのことについて教えてほしい！と言われたので説明すると笑顔で「ありがとう」と言ってくれました。今まで募金活動には1回しか参加したことがなかったけれど直接、自分たちの活動が役に立っていることを見てこれからもっと積極的に参加しようと決めました。

カンボジアに行ったのは初めてだったのですが、カンボジアの人たちの人懐っこさや、笑いかけると知らない人でも必ず笑い返してくれるフレンドリーさが私は心地よく感じました。また、国内格差はあるものの想像していたよりは発展していて、新しい建物がどんどん建っていたので数年後にはもっと変わっているんだろうなと思いました。もう一度、カンボジアへ行ってどれだけ変わったか見てみたいと思いました。カンボジアに行ったことは私の考え方へ大きな変化を与えてくれたように感じます。